

白川地区 4月22日(火) 町民会館

○参加人数 32名

【懇談会要約】

■三戸 (1番テーブル)

高齢者の割合が高まる中、「終活」やお墓の整理といった人生の終盤に向けた備えの必要性が多く語られました。また、こうしたテーマについて若い世代も関心を持ち、消防団など若者が集う場で話題にしていくことの重要性が指摘されました。仲間づくりの拠点や、気軽に集える空間の整備も求められました。さらに、福祉に特化したまちづくりに転換し、高齢者を全国から迎える構想もあり、これは廃校の利活用とも連動可能との意見も出ました。「廃校になってからでは遅い」として、早期の具体的な活用計画が必要との声が上がりました。

■杉山 (2番テーブル)

これからの地域運営を考える中で、行政・地域の双方で組織をスリム化する必要があるとの意見が出され、役職数の削減などが話し合われました。移住者が増えにくい現状を踏まえ、地域側の受け入れ体制の整備が重要との指摘がありました。廃校施設の利活用については、旧白川小学校のようにレッドゾーンにある空き校舎についても、共同宿泊施設など限定的な活用を検討すべきとの声がありました。また、公民館の利用頻度が少ないことから、独居高齢者の共同生活拠点として再活用する提案もありました。地域資源を見直し、福祉や住環境に活かしていく視点が求められました。

■伊佐治 (3番テーブル)

高齢化が進む中で免許返納者が増加しており、地域交通の再整備が必要との意見が出ました。ライドシェアの導入や公共交通の見直しが必要とされました。また、遠くに住む親族に頼らずに安心して暮らせるよう、ライブカメラなどを使った見守り体制の構築も提案されました。自治会の役職や制度の見直し、行政サービスの再設計も議論され、ごみ減量や資源回収へのアクセス改善など、日常生活の課題についても意見がありました。高齢者に優しい制度づくりとテクノロジーの活用による持続可能な暮らしの実現が望まれました。

■田口 (4番テーブル)

暮らしの安心を求める声が多く上がり、道路の段差や損傷の修繕が最優先との意見が出されました。特に、県道下呂白川線では大型車の通行による劣化が進んでおり、補修の強化が求められました。さらに、洪水時に旧松ヶ瀬橋に立木が引っかかる危険があるため、災害対策として橋の撤去を望む声もありました。地域内に福祉施設がないことに対する不安や、商店の減少による買い物の不便さも課題に挙げられました。高齢化が進む中、「住んで安心できる環境づくり」への町の本格的な取り組みが期待されています。

■佐伯 (5番テーブル)

少子化と地域文化の衰退を背景に、10年後を見据えた危機感が共有されました。特に、子どもたちに希望を与える行事や、文化継承が難しくなっていることが課題とされました。移住者支援の強化や、農林業の活性化が必要とされました。また、現行の移住交流サポートセンターをさらに強化する意見もありました。また、「免許は人生のパスポート」との声がある中、返納による影響が大きいとの体験談も紹介され、地域内限定の運転を認める制度の検討も提案されました。新たな発想によって、暮らしの質を高めることの大切さが語られました。

■梅田（6 番テーブル）

「ウォーキング」をきっかけに、高齢化を前向きにとらえた地域づくりの意見が交わされました。健康寿命の延伸や自然環境の活用により、地域活性化を図るべきとの声がありました。ウォーキングの日の制定や、町内巡りにポイントがつく仕組み、鮎釣りなど自然体験を通じた施策が提案されました。移住促進に向けては、自然を活かした体験型の取り組みやツアーを通じて、白川町の魅力を伝える必要性も指摘されました。健康・交流・自然をキーワードに、明るく前向きな地域の未来像が描かれました。

■今井（7 番テーブル）

人口減少が避けられない中で、移住者の受け入れを本格的に進めるべきとの声が上がりました。空き家を活用した定住支援として、町による土地や住宅に関する補助制度の拡充が望まれました。条件を工夫すれば、より多くの移住者を呼び込めるとの意見もありました。あわせて企業誘致による雇用の創出も必要で、そのためには町の魅力を積極的に発信する“営業担当”のような専門職の配置が提案されました。限られた予算を活かしつつ、「移住・定住・雇用」の三位一体で未来を描く必要があるとの意見が出ました。

■渡辺（8 番テーブル）

データをもとに現状を確認しながら、10 年後の町の姿について具体的な意見が交わされました。最大の課題は「働く場所の不足」であり、企業誘致の必要性が繰り返し指摘されました。特に、若年層の定住や移住を促進するには、安定した雇用の確保が不可欠とされました。廃校を大学のゼミ合宿や研修に活用し、地域外との交流を生み出す提案もありました。人口減少と少子高齢化が進む中、町の未来を見据えた戦略的な分析と現実的な施策の実行が必要であるとの意見が示されました。

■藤井（9 番テーブル）

白川茶の生産現場での高齢化が課題として挙げられ、特産品の継承と産業の再構築が必要との意見が出されました。静岡の生産者との交流を通じて、10 年後の持続可能な経営モデルを学ぶ取り組みも紹介されました。また、自治会活動の負担感や担い手不足も大きな課題とされ、地域組織の在り方の見直しが必要との声がありました。森林率 90%超という特性を踏まえ、山林の持続的な経営が重要であり、近隣市町と比較しながら白川町独自の森林活用戦略を研究・実行していく必要性が示されました。

【白川地区のまとめ・特性】

今後の地域のあり方や廃校施設の活用について、多様な意見が交わされました。高齢化が進む中、買い物や移動手段、医療・福祉施設の不足といった、日常生活に直結する課題が多く挙げられました。また、廃校や公共施設の利活用については、防災、学び、交流の拠点として再活用を図る提案が目立ちました。地域の将来を見据え、「暮らしの安心を支える仕組みづくり」と「地域の魅力や文化を次世代につなぐこと」の両立が重要であるという認識が共有されました。